



第二号
火災保險案

大藏省火災保險取調掛之印

32
-8-

1
1-14

2



114
A 3617
1



家屋保險ニ付テハ其火災ノ危殆ヲ知ルヲ須要トス更ニ
 該家屋火災ヲ受クヘキ危険大小ノ度ヲ知ルヲ要トス
 僕今左ニ記載スニ火災危殆ニ關スル說ハ一ニ唯ク論理上ニ
 止ルノニ其引証マシテハ唯ク僕從來蒐集セル材料ニ準拠シテ
 論理上ヨリ推算マル火災相当ノ保險賦金ヲ舉示スルニ過キス
 但シ是レハ之レ實際確定マシルベキ保險料ノ高ク高量スルノ
 基礎則チ其準繩タルモノナリ蓋其高量ニ際シテハ尚ホ實際ヲ
 参考斟酌スルヲ要ス是故ニ僕本章中論理ノ一端ヨリ承認シ得
 タル數及マシ準ハ尚ホ實際ノ狀況ニ應シテ取舍マシルベキ
 ハ姑ク之ヲ顧ミス其實際上ニ注目スヘキ要件ハ等ニ下章ニ
 至リ始メテ陳述スルアラントス
 從來日本ノ火災ハ外ヨリ伝及セル教家屋ノ内部ヨリ發出セル

大正十一年四月
隈侯爵郵寄贈

モノニ超エルコト廻カニ著大ナリ

註ニ曰ク日本全國中消レ止メレ火災ヲ除キ一千八百七十五年七月一日ヨリ同ク七十八年七月一日迄全三年間ニ於テ内部ヨリ發出セシ火災二万四千六百四十九又他ノ家屋ヨリ延焼セシ數ハ六千八百〇八十個タリ

火災ノ種類	焼失家類				類焼家類			
	千八百五十五年ヨリ 全 六年迄	千八百五十六年ヨリ 全 七年迄	千八百五十七年ヨリ 全 八年迄	千八百五十八年ヨリ 全 八年迄	千八百五十九年ヨリ 全 六年迄	千八百六十年ヨリ 全 七年迄	千八百六十年ヨリ 全 八年迄	千八百六十年ヨリ 全 九年迄
放火非ノ原由 明白ナルモノ	四、〇六十六	七、二五五十二	六、〇八十八	七、〇七五〇六	三、〇三三〇八	三、〇六六、七三三	九、六六三、三四	三、〇九、〇一五
放火非ノ原由 不明ナルモノ	五、〇八一	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三
放火	五、〇八一	二、〇六三	七、〇三三	五、〇三三	二、〇三三	八、〇三三	七、〇三三	七、〇三三
焼込	六、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三
類焼	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三
合計	二、〇三三	四、〇三三	二、〇三三	九、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三	七、〇三三

故ニ本論中著大ナルモノヲ上位ニ置テ火災危殆ノ原由ニ係ル

二個種類ヲ區別スルノ左ノ如シ

甲 外部ヨリ延焼スベキ關係

乙 内部ヨリ發出スベキ關係

但シ家庭火災ヲ受クベキ危殆ハ右ノ外亦他ノ事ハニ關係アルモノナリ則チ

丙 制度設立ノ狀況之ナリ

甲 外部ヨリ延焼スベキ關係

第一 故ラニ堅牢ニ建築セル家屋所謂土蔵及ヒ土蔵造リナルモノハ外部ヨリ火災ヲ受クルノ極メテ稀レナリ因テ其隣屋火災危殆ノ状ヲ有スルト否トニ於テ殆ント平等無感ナル如シ故ニ其保險賦金ハ論理上ニ於テ唯々左ノ事件ニ係ル入費ノ納附

ヨリ成ルベキノミ

イ 内部ヨリ發出スル火災危険

ロ 地震或ハ

ハ 戦争ヨリ生スル危険

ニ 消防設備

ホ 行務

ヘ 豫備金其他諸雜費

註曰洪水若クハ暴風雨ニ因テ壊碎スヘキ危殆ハ此堅牢家
屋ニ在テハ極メテ稀有ノ事タリ

僕曩キニ編纂セルヒ本火災保險論中蓋シ本論中ニハ堅確ノ旨
意ヲ先キニシ凡ソ生シ得ベキ諸種危険ハ重モニ之ヲ高ク看積
リタリニ掲ケル價定ノ結果ニ拠ルニ蓋シ日本ノ火災地震暴風
雨洪水戦争等ニ對シ保險局大出納局ヨリ年々平均支出高ハ家

屋ヲ以テ當算スルニ其總計蓋シ左ノ如クナルベキモノト信ス

火災ノ損害ニ對シ 四万四千〇八十五家

地震ノ損害ニ對シ 二千家

洪水ノ損害ニ對シ 二千家

暴風雨ノ損害ニ對シ 五百家

戦争ノ損害ニ對シ 六千五百家

消防費 五千〇七十五家

行務 五千三百八十五家

今尙一層ノ注意ヲ要スルカタメ往キノ價定高ハ更ニ四千五百
三十一家ヲ加ヘ以テ行務消防費等ノ見積不足ノ追加高トシ之
ヲ引當テ置キ以テ豫備金ニ供スル時ハ 四千五百三十一家

統計 七万〇〇七十八家

則チ僕往キノ著述中第九款ノ註文(一千八百七十六年一月一日

ノ調査表ニ本ツキ決定セル日本家屋全数ノ百分一二当ルモノ
ナリ一十千八百七十六年一月一日ノ調査ニ従ハハ運教ハ七百二
ク三十個

但レ己ニ本篇ノ端首ニ記載セル四万四千八百八十五家ハ毎年卒
均ノ焼失高ニ非ス之レニ反レテ實際三十年間ノ平均ニ據
唯々三万九百十家ノ二年々焼込セリ故ニ準備金引当高ハ尙
万三千七百七十五家ト為スヲ以テ蓋シ正當ナリトセン
故ニ然ル時ハ準備金ノ引当ハ四千五百三十家ニ尙万三千七百
十五家ヲ加ヘ都合尙万七千七百〇五家ナリ
次ニ各百田ノ家屋 付キ平均尙田ノ保険料ト看積リ而シテ尙
田ヲ引當ツル割合ハ左ノ如シ

火災 四拾 銭貳厘
地震 貳銭九厘

洪水	貳銭九厘
暴風雨	七厘
戦争	九銭三厘
消防費	七銭貳厘
行務	七銭貳厘
預備及、引當金	貳拾五銭七厘
百田ノ家屋保険料	尙田

右百分一ナル平均保険料ハ充分高ク之ヲ看積リタルモノナリ
何ントナレハ此保険料中準備家屋ノ高尙万七千七百〇五家ト
ルモノハ全支出家屋高七万〇〇七十八家ノ四分一ニ居レハナ
リ

但シ己ニ火災統計表ノ設ケアル全三年間ノ火害ハ年々平均高
上條ヲ参考スベシ

故ニ其額

壹万七千七百〇五家

則チ七万〇〇七十八家ナル全家屋支出高ノ四分一ニ当ルモノ
ナリ故ニ平均保険料ハ堅確ノ主義ヲ先キニシ四分一過高ニ之
ヲ見積リタリ

所謂土蔵造ナル建築ニ在テハ通常ノ火災ハ之ヲ受ケズ唯々自
家内部ヨリ發出スベキ危険ヲ免ケル、能ハサルノミ然リ而シテ
予ハ已ニ看官ト共ニ上章ニ於テ消防費ヲ除キ一千八百七十五
年ヨリ同ク七十八年ニ渉ル三年間ニ日本全國中ニ生シタル火
災ハ左ノ如クナルトテ看タリ

内部ヨリ出火

二万四千六百四十九

延焼

六万八千〇八十

三年間總計

九万二千七百二十九

故ニ内部ヨリ發出セル火災ノ危険ハ唯々九万二千七百二十九

個中ノ二万四千六百四十九ニ當ル則チ火災ニ因テ燒亡セル金

危殆ノ率分數二十五、六ニ居ルノミ

此故ニ土蔵造リ家屋ノ保険料トシ定ムベキモノ左ノ如シ

イ 火災ニ對シ四拾四錢貳厘ノ二割五歩六則拾貳錢三厘

ロ 地震 貳錢九厘

ハ 戦争 九錢三厘

ニ 消防費 七錢貳厘

ホ 行務費 七錢七厘

ヘ 豫備等諸引当高 貳拾五錢貳厘

總計 六拾三錢五厘

土蔵造リノ家屋ニ對スル保険料平均高トシ保險價百円ノ家格

ニ在テハ六拾三錢五厘タリ

所謂煉化造リナル家屋ニシテ堅牢ノ屋根ヲ具有マルモノモ亦

石ノ種類中ニ集入スルハ蓋シ大過ナキモノトス

(第二) 家屋若シ外方ヨリ来ル延焼ニ對シ堅牢ノ構アラサル時ハ数多ノ事由ヨリ大イニ火災ノ大小ニ關係ヲ生スルモノナリ則チ其本未多少火災ニ罹リ易キ性質(則チ屋根及ヒ周圍壁牆ノ損様等)ノ外尚ホ其隣接及ヒ場所柄等之ナリ
今僕ハ此諸事件ヲ左ノ順序ニ從テ考究セント欲ス

イ 場所

ハ 隣接

ロ 屋根

ニ 周圍ノ壁牆

イ 場所 僕已ニ著述セル日本保險論(其第十葉)ニハ「ハ」ルウエーケンニ於ケル三十年間ノ統計表ヲ引用セリ抑シ同國ヲ註例トシ引用セシ所以ノモノハ其市街及ヒ其村落中建築多ク木材

ヲ使用セルコト日本ト相ヒ同シケレハ資テ以テ相ヒ比較スルハ亦不当ト云フベクテサレハナリ而シテ同書中ニ彼國ノ市街ハ其村落ニ於ケルヨリ火災ヲ受クルノ多キヲ蓋シ三倍ニ及フヲ記載セリ夫レ市街ニ於テハ其屋宇數多ナルニ應シ火災ニ罹ルモノ亦村落ニ於ケルヨリ大ニ多ク且ツ市街内各區ノ火災ハ其危殆通常村落ニ於ケル如キノミナラス尚ホ離隔セル諸區ノ各家屋ト雖モ亦常ニ危殆ヲ免レス凡ソ木材建築ノ市街ハ他因ノ有無ヲ問ハスレテ火災ノ危殆ハ己ニ自ラ保有スルヤ甚シ爰ニ若シ火災一タヒ某境域ヲ越ヘテ蔓延セル時ハ蓋シ風勢ヲ著リ或ハ能ク各家屋ヲ一時ニ蠶食シ尽ストイハ其間ニ流火災發出セハ其猛火直チニ他家ヲ接衝セストイハ其間ニ流通ニル燄氣ノミヲ以テ能ク他ノ家屋ヲ延焼セシムベキ熱度ヲ生セシムルモノナリ

火災ヲ受ケ易キ建築ヲ有セル地積愈々私濶ナレハ此不堅牢ナル各家屋ノ間ニ存在セル危険ノ状ハ蓋シ倍々甚シキモノナリ故ニ論理上ニ於テハ火災ニ危殆ナル家屋ノ保険料ハ該家屋ノ現在セル地ノ私狹ニ從テ其高ヲ定メラルベキモノトス

東京ニ於テハ一千八百七十四年一月一日ヨリ同ク七十八年十一月一日迄五十八ヶ月間ニ燒失セル竈數三万三千七百六十四則チ毎月平均五百八十二個一四各年平均六千九百八十五個六ハタリ

千八百七十四年一月一日ヨリ同ク十二月三十一日迄	二千三百〇三竈
千八百七十五年一月一日ヨリ同ク十二月三十一日迄	二千二百七十三竈
千八百七十六年一月一日ヨリ同ク十二月三十一日迄	

千八百七十七年一月一日ヨリ同ク十二月三十一日迄
 一万八千三百五十五竈

千八百七十八年一月一日ヨリ同ク十月三十一日
 四千九百二十三竈

千八百七十九年一月一日ヨリ同ク十月三十一日
 五千九百〇七竈

總計 五十八ヶ月ニ於テ 三万三千七百六十四竈

一千八百七十八年一月一日ノ調査ニ從テハ蓋シ東京ノ竈數ハ二十二万七千五百六十二個タリ故ニ平均年々百分ノ三〇七ノ燒失ナリ

今東京ヲ以テ格別ノモノトシ之ヲ他ノ諸國外ニ異キ別ニ計算スル時ハ日本火災ノ形状ハ左ノ如シ

竈數	日本全國 東京ヲ除キ日本全國	東京
	七百二十九万三千〇八十六	二十二万七千五百六十六
		七百〇六万五千五百二十

年々火災罹リニ罹 数平均高	三万〇九百十	六千九百八十六	二万三千九百二十四
全寔数ノ 百分比例	百分ノ〇、四二	百分ノ三、〇七	百分ノ〇、三四

東京ニ於テハ年々平均焼失数全寔数百分ノ三、〇七ニ及フ此故ニ全國中他ノ地方ニ於ケルヨリ其多キ一凡倍セリ

上表ニ記載セル数ハ専ハラ堅牢ナラサル家屋ニ就テ之ヲ算スルモノナリ何ントナレハ其焼失セル家屋表中土蔵ハ特ニ其数ヲ記載セラストイハ氏蓋シ極メテ僅些ナルモノナレハナリ故ニ僕ノ考定マル結果ニ據レハ火災ニ對シ堅牢ナラサル建築ノ家屋東京ニ於テハ日本中他所ニ於ケルヨリ其危険九倍ノ多キニ及フ

右着目スベキ結果ハ僕更ニ他説ノ以テ能ク証明スルヲ得ベシ抑一一千八百七十八年一月一日ヨリ同ク十月三十一日迄十ヶ月間ニ係ル東京火災統計表ニ於テハ家屋ヲ其建造ノ種類ニ

從テ區別シ亦数多藁葺ノ家屋ヲモ記載セリ但シ外見ニ據テ推定スルニ東京府内ニ於テハ藁葺家屋ハ一モ之ヲクシテ唯ク其周邊及テ同府廳ノ管轄ニ係ル府外村落ニ於テノミ之レアル如シ故ニ東京朱引内ニ對シテ東京朱引外ノ市街及村落ヲ區別シ全ク兩者トス然リ而メ已ニ記載セル如ク東京ノ火災危險ノ度ハ之ヲ他方ニ比較スルニ蓋シ九倍ノ多キ一果シテ正実ナル時ハ東京朱引内ト東京朱引外ニ於テモ亦同等ノ比例ヲ生スルヲ有ルベシ

東京火災統計表ニ據レハ一千八百七十八年中一月ヨリ十月マテノ焼失左ノ如シ

藁葺	
卒家	百十三軒
二階家	六十九軒
	千二百二十九坪六合。
	五百四十坪。

物置 四十志軒 三百三十五坪。〇。
 板圍藁葺物置 七軒 四十志坪五。〇。
 藁葺家屋焼失總計 二百三十軒 二千四百四十六坪一。〇。
 一千八百七十八年九月三十日ノ調査ニ拠ルモ東京中ニ於ケル
 藁葺家屋ノ数ハ

木皮屋根 百五軒 此坪数 千。六十二坪一。二
 故ニ村落家屋合計 三万八千五百二十七軒 八十二万。〇。六十九坪一八

故ニ東京府外ハ十二万。〇。六十九坪ノ中十ヶ月以内焼失セシ
 家屋ハ二千四百四十六坪則チ百分ノ。二六タリ
 已ニ記載セル同統計表ニ本ッキ其十ヶ月以内ニ係ル全東京ノ
 焼込数及ニ其總坪数ヲ爰ニ追考スルニ其高左ノ如シ

東京府管轄一円 東京村落 同市府

總坪数	三百三十二万三千六百九十三	八十二万。〇。六十九	二百五十万。三千五百七十四
右ノ内焼込高	五万六千五百五十五	二千四百四十六	三万四千。〇。九
全数中焼込百分ノ割	百分ノ一。七	百分ノ。二六	百分ノ二。一六

是故ニ東京市街ハ東京村落ト火災危殆ノ比例ヲ為スニ。二六
 ト二、一六ノ割合ニ當リ則チ一ト八、三ニ於ケル如シ
 若シ東京市街外ノ村落ニ東京市街ノ藁葺家屋ヲ算入セ
 ス(此市街ハ其位地危殆ナルケ故ニ通常村落ノ藁葺家屋ヨリ火
 災ヲ受ルルチ多キモノナリ)故ニ東京府外ノ村落ニ對スル焼失家
 屋ノ總計中ニ右前街ノ焼失高ヲ加ヘナル時ハ則チ東京府外村
 落ト同府内市街ノ火災危殆ノ比例ハ頗フニ一ト九ノ割合若ク
 ハ尚オ著大ナル差ヲ生スベケン
 其他日本全國火災統計表ニ就キ全國市街焼込ノ数ヲ抜キ之ヲ
 尔他ノモノヨリ分別シ(然ル時ハ諸村落ノ火災危殆ノ数ハ甚々

減却スベキヤ蓋シ亦論ヲ疾々ス(而ノ其諸村落ニノ之關スル火災
 統計ヲ以テ之ヲ東京ノ火災統計數ニ對照セシメ得ル時ハ顧フ
 ニ其東京ニ於ケル火災ノ割合ハ尚才一層増加シテ村落ニ於ケ
 ルヨリ不利倍ニ甚シキヲ看ルベキナラン然ル場合ニ於テハ東
 京ノ火災危殆ノ度ハ村落ニ於ケルヨリ十倍多キモノト價定ス
 ヘキナラン否然ラサルモ若シ一層深密ニ之レヲ算スルハ実
 ニ東京府内ノ火災危殆ハ十ニシテ府外村落ニ於ケルモノハ一
 ニ當ルノ割合ヲ看ルト得ベシ
 則チ府外ノ村落ニ於テハ石屋其他火災ヲ受ケサル堅牢ノ家屋
 ハ極メテ稀レナリトイヘ其東京市街ニ於テハ尺ニ數多ナル
 丁僕爰ニ看官ト共ニ回想セサルベカラス先ツ東京中其建造堅
 牢ニシテ火災ノ患少ナキモノヲ除キ去リ更ニ東京中ニ於ケル
 火災危殆ノ建造家屋ヲ村落中ニ於テ尚ホ一層危殆ナルモノト

比較スルニ其東京ニ於ケルモノノ結果ハ猶才數等ノ患シキヲ
 覺テ則チ
 東京ヲ家屋左ノ如シ

堅牢ノ家屋		坪數		家屋數		坪數	
煉化	煉石	煉石灰	煉土藏	煉石藏	總計	其内燒失高	百分數
五百	四百	千九百四十八	二万二千百〇五	百七十八	二万四千七百七十五	一	七十二
二千七百六十	八百七十二	二十万四千八百〇三	十七万二千四百九十九	二千四百六十九	四十万二千四百〇一	〇	〇
一	〇	二十四	〇	〇	二十五	〇	四百七十七

此内千八百七十八(一月一日ヨリ) 同十月三十一日迄ノ燒失

故ニ石同時間ニ係ル同府内外ノ結果左ノ如シ

東京府内 村落ヲ 除ク	二百五十三千五百七十四坪	五万四千〇〇九坪	百分ノ二、一六
右内堅牢部分トシテ除クキ数	四十万二千四百〇七坪	四百七十七坪	百分ノ〇、一一
故ニ府内危険ノ部分	二百〇九万千七百七十三坪	五万三千五百二十二坪	百分ノ二、五六
村落ニ於ケル危険ノ部分	八十二万〇〇六十九坪	二十万四千六十六坪	百分ノ二、二六

由是之ヲ觀レハ東京ノ火災ニ對シ堅牢ナラサル建造家屋ハ諸村落ニ於ケルモノヨリ其危険十倍ノ多キニ及ヘリ則チ相比較スルニ其割合〇、二六トニ、六ニ相当スルモノナリ

蓋シ斯ノ如ク東京ヲレテ著レク火災ニ危殆ナラシムル本源ハ專ラ其弘濶ナルニ基スルガ故ニ凡ソ日本國中他ノ市町ニ於テモ其廣狹ニ應レテ火難ノ大小自ラ等差アリト云ハサルヲ得スレ

但レ市街ニレテ廣濶ナル時ハ村落ニ於ケルヨリ危殆ノ度特ニ甚レキモノトイヘニ未タ必スレモ獨リ其廣濶ノミ之レガ事由ト云フベカラス尚チ町家交互ノ地位則チ隣屋近接モ亦茲ニ大

イニ關係ナルモノナリ

故ニ万等同等ノ形状ニ居ルトイヘニ獨リ市街ノ村落ニ殊ナリ

火災危殆ノ甚レキモノハ固ト二箇ノ原因ニ歸ス則チ其弘濶ト比隣相接スル之ナリ

但レ下章隣屋接近ニ關スル事件ヲ縷述スルニ際シ實際何等ノ事由アリ以テ保險籍ヲ調製スルニ臨ミ隣接ノ關係ハ更ニ着目スルヲ要ヤサル歟ヲ説明セント欲ス

己ニ隣接ノ關係ヲ着目ヤサル時ハ復タ市府ノ火災危殆數ニ於テ其二因ヲ相分別スルヲ要ヤス唯タ市街ノ廣狹ニ從フノミ其等級ヲ定ムベレ但レ此等級定方ハ概畧左ノ如ク為スベレ

住民ノ數二千五百人以下ニ係ル所ハ火災危殆ニ關シ總テ之ヲ村落ト視做ス

同 五千人以下ニ係ル所ハ火災危殆ニ關シ村ノ二倍トス

同	一万人以下	= 係ル所ハ同	三倍トス
同	二万人以下	= 係ル所ハ同	四倍トス
同	四万人以下	= 係ル所ハ同	五倍トス
同	八万人以下	= 係ル所ハ同	六倍トス
同	十六万人以下	= 係ル所ハ同	七倍トス
同	三十二万人以下	= 係ル所ハ同	八倍トス
同	六十四万人以下	= 係ル所ハ同	九倍トス
同	百二十八万人以下	= 係ル所ハ同	十倍トス
故ニ設例ハ東京ハ村落ニ越ヘ火災危殆ノ甚レキト十倍西京ハ			
八倍奈古屋金澤ハ七倍仙臺熊本富山ハ六倍新潟徳島ハ五倍			
酒田及々下ノ関ハ四倍ナルベシ			
註曰本数ハ明治第十年正院地誌課ニ於テ編集セラレタル			
日本地誌提要ニ準據スルモノナリ則チ同書ニ曰ク			

西京人口	二十三万八千六百六十三
奈古屋人口	十二万五千百九十三
金澤人口	十万〇九千六百八十五
仙臺人口	五万九千九百九十八
熊本人口	四万四千六百二十
富山人口	四万四千六百八十二
新潟人口	三万三千百五十二
徳島人口	二万七千二百四十四
酒田人口	一万八千六百十九
下ノ関人口	一万八千五百

